

## 平成 26 年度 研究成果報告書

### Research Achievement Report FY2014

講座名・職名 Course Title・Job Title	ヨーロッパ・アメリカ I 講座・教授
氏名 Name	渡邊 克昭
専門分野 Academic Field	アメリカ文学・文化

主たる研究テーマ Principal Research Subject	アメリカ文学におけるヒューマン・エンハンスメントの進化と 「幸福の追求」の未来学
<p>平成 26 年度はまず、前年度の科研基盤研究(C)の研究テーマ、「20 世紀アメリカ文学における進歩のデザインと破局の表象に関する文化史的研究」の研究成果として、論文「噴火・蒐集・生成—『火山の恋人』における歴史の創造/想像」『災害の物語学』中良子編、世界思想社、2014 年、74-101 を 5 月に上梓した。</p> <p>本年度が初年度にあたる科研基盤研究(C)の研究テーマ「アメリカ文学におけるヒューマン・エンハンスメントの進化と 『幸福の追求』の未来学」については、まず通時的観点からヒューマン・エンハンスメントのヴィジョンを多様なメディア表象の分析を通じて抽出し、本研究の基盤をなす見取り図の作成に取り掛かった。アメリカの神話やジェンダーも視野に入れ、必ずしもそうした事象を明示的に扱っていないテキストにも留意しつつ、19 世紀以降のアメリカ小説においてエンハンスメント的要素がいかにかに埋め込まれ、表象されてきたか、マッピングを行った。そのような見取り図を踏まえつつ、DeLillo、Powers、Vonnegut、Atwood の小説を手掛かりに、能力増強、遺伝子操作等など、生命のデザインに関わる領域において、次の 4 つの問題系を中心に考察を進めた。1)生命の道具化と商品化、2)リベラル優生学と公平さ、3)人間の不完全性、生の被贈与性、4)メタフィクショナルなデザイン。そのうえで、特に 1980 年代以降のポストモダン・フィクションにおけるエンハンスメント志向に焦点を絞り、それらに描出された言説や情念の分析を通じて、アンチエイジングや死の恐怖といったテーマが「幸福の追求」といかなる関係を切り結んでいるかを検証した。これらの作業と並行し、時代精神を反映するポピュラー・サイエンスなど 科学・医療メディアの言説に焦点を絞り、多角的にエンハンスメントの表象分析を行った。</p> <p>以上の考察を踏まえ、研究の一端を平成 26 年度日本アメリカ文学会中・四国支部冬季大会シンポジウム（於：広島県立大学、2014 年 12 月 13 日）「アメリカ文学における幸せの追求」のシンポジウムにて講師として発表し、論文「『幸福』のこちら側—Richard Powers の <i>Generosity</i> に見る Exuberance と Resilience」『英米研究』第 39 号、大阪大学英米学会、2015 年、31-55 にまとめた。本論文では、Powers の <i>Generosity</i> において、「書くことは常に書き直すこと」というメタフィクショナルな言説が、ゲノムの編集との関係において神学的意味を帯び、遺伝子の「書く」と「書き直し」の狭間に生息するメタフィクショナルな「亡霊」Thassa が、まさに人類の岐路を占う試金石として、Exuberance と Resilience を惜しげもなく包摂する詩神だったことを明らかにした。</p>	